

保育園における子どもの造形表現支援の実践

—プロジェクト「花は野にあるように」の記録—

A Practice of the Support for Children's Art Expression in Nursery Schools:
A Document Concerning a Project "A Flower Should Be in the Fields"

捧 公志朗
SASAGE, Koshiro

Abstract

This report gathers a practice record of the project "a flower should be in a fields" undertaken in the art space "nohako" which works in Nakano-ku, Tokyo. This project prepares an opportunity for the nursery schools of the area, the children, and their care workers to touch an art through participation in a print artist's work and its work process by Hiroki Satake. The art space "nohako" planned this project with the writer, and the project proposed the childcare environment which supports the children's expression activities.

キーワード：保育における表現、保育と子どものためのアート、ソーシャルアート、アートコミュニケーション

はじめに

本レポートは、東京都中野区内の保育園とアートスペース nohako において行われたプロジェクト「花は野にあるように」の実践記録をまとめたものである。

プロジェクト「花は野にあるように」は、版画作品を制作するアーティストの佐竹宏樹氏の作品とその制作プロセスへの参加により、地域の保育園とそこに在園する子どもや保育関係者がアートにふれる場と機会を設け、子どもの表現活動を支援していく保育環境を提案するプロジェクトである。

プロジェクトのアートワークを担当した佐竹氏は、ステンシル版画の技法を用い、「花柄」による人物や群像の平面作品を制作するアーティストである。佐竹氏の作品は、「花柄」をアイコンとした人物の肖像画であり、他者に対する自身の意識を表現するものとして制作されている。佐竹氏は作品の制作コンセプトを、「私の知りうる人々」を「版的手法」で「三原色」による「花柄」で描

いたもの」と定義付けている。そしてその実践において、通常の印刷工程における三原色に分解されたドット柄を「花柄」に置き換えながら、身近な存在である「私の知りうる人々」(他者)に対する親和的意識をより広範囲な私たちの住む世界へと拡げ、その世界自体に向けて花を贈る自覚を平面作品として表出させている。こうした佐竹氏の制作態度は、アーティストとしての自己認識を社会に繋げていく作業であると筆者は考えている。

そして、東京都中野区というローカルエリアにおいて展開する今回のプロジェクトを通じ、保育現場とアート作品の接点を提示していく表現行為をインスタレーションアートと捉え、プロジェクトが展開されるプロセスやそこに関わる者の主体性を、文化の創出に向けた表現活動であると考えた。本レポートにおけるプロジェクトの報告は、そうした思考性を省察しつつ、保育における造形表現の意義や子どもを取り巻く地域社会について確認をしていくものである。

1. プロジェクト「花は野にあるように」について

1-1. プロジェクトの目的

プロジェクト「花は野にあるように」は、以下の二つの実施目的を持っている。

・保育園における造形表現活動の活性化に向けた環境の提案

保育現場において行われる造形表現活動は、画材を用いた絵画・描画活動や、具体的な実素材を使った工作活動が主であるとされる。子ども達は絵を描いたり立体物を作ったりと、手を動かしながら変化する作品の形や色の状況、あるいは素材そのものの変化を、視覚や触覚を通じて感覚し、その繰り返しにより表現行為を楽しみ、自己の感性やイマジネーションを拡げていくのである。今回のプロジェクトは、そうした子どもの造形表現を活性化し、保育現場の環境的側面から支援する試みとして、保育園において実物のアート作品を展示設営することを提案するものである。保育における子どもの表現への取り組みを具体的な制作経験から支援するだけでなく、感性を刺激する視覚媒体としてのアート作品を保育環境に存在させ、日常的にアートにふれる機会と場をつくり出しながら、「表現」と「環境」の統合や、子ども自身の感性に対する助長の在り方を考えてみたい。

・アーティストとの作品制作の経験を通じた保育現場とアートの接続

今回のプロジェクトでは、子どもとアーティストとの作品制作の経験により、保育現場とアートを接続し、保育現場における造形表現活動の可能性を拡げることを目指した。保育は、子育て中の家庭や保育園や幼稚園等の

保育・幼児教育施設、あるいは保育士や幼稚園教諭といった保育者だけが対象ではなく、子どもを取り巻く社会や多くの大人との関わりも含んでいるものである。本プロジェクトで子どもの造形表現に関わる適切な目的と組織作りを計画することにより、「子どもを取り巻く地域社会」から保育現場への接続の可能性を見出せると考えた。アートを表現方法とするアーティスト側からの保育現場へのアプローチは、保育における造形表現への支援、あるいは表現教育活動としての目的を明示することにより、そうした「子どもを取り巻く地域社会」から保育に関わっていくモデルケースとなるであろう。

1-2. プロジェクトの概要

プロジェクト「花は野にあるように」では、アートワークをアーティストの佐竹宏樹氏が担当し、東京都中野区内の五つの保育園の参加協力のもと、各園の3歳児クラスの園児を対象とした絵画作品を制作した。作品は一般公開展示発表後、それぞれの園に寄託し、展示設営を行った。

- ・プロジェクト名：花は野にあるように
- ・企画、オルガナイズ：捧公志朗、アートスペース nohako
- ・アートワーク：佐竹宏樹（アーティスト）
- ・プロジェクトへの参加保育園：
中野区立江原保育園、中野区立白鷺保育園、中野区立大和東保育園、中野区立弥生保育園、社会福祉法人青柳保育会・七海保育園
- ・協力：中野区子ども教育部
- ・作品制作期間：2015年11月－2016年4月
- ・一般公開展示発表：2016年5月13日－6月5日、アートスペース nohako（東京都中野区）
- ・作品の寄託、展示設営：2016年9月

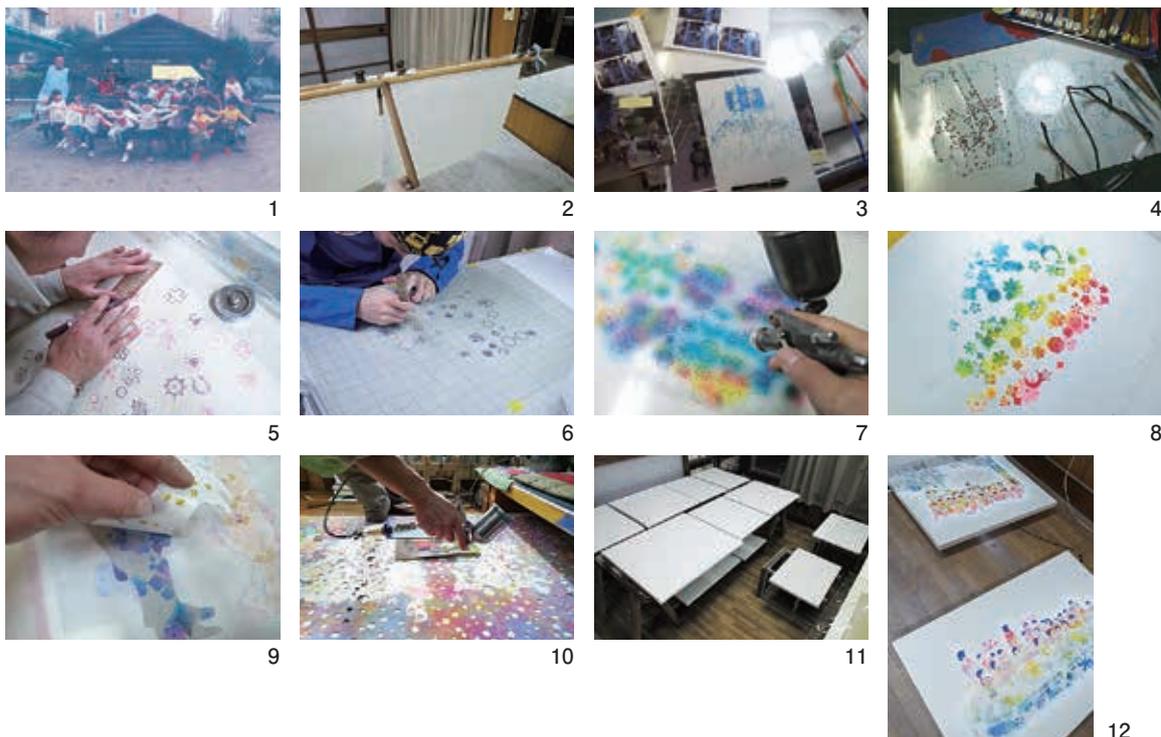
2. プロジェクトの記録

2-1. プロジェクト作品の制作過程

プロジェクト作品は、参加協力園のクラスの群像をもとに、ステンシル版画の技法を用いて制作された。制作工程は、各園において対象となる3歳児クラスの集合写真を撮影し、作品サイズに拡大したプリントより群像の

人型や背景を切り抜いたフィルムシートを準備することから始められる。そして、そのフィルムシートをステンシルの型として和紙の上に三原色の「花柄」の図像を重ね描き、パネルに張り込み、絵画作品として完成する。作品は人物画でありながらも、他者に対するアーティストの親和的な感性が「花柄」に象徴され、鮮やかな色調に仕上げられた。

〈プロジェクト作品の制作過程〉



- 写真1. 作品のモデルとなる園児を撮影し、和紙、パネルサイズを検討する
写真2. 紙素材の準備、和紙にドーサ引き（目止め）する
写真3. 拡大コピーした原稿（人物シルエット）を透明フィルムにトレース
写真4. 彫刻刀でカット（人物ステンシル版の作成）
写真5. 人物シルエットに合わせて、紋きり文様をアレンジ（3版）
写真6. 紋きり文様をフィルムにトレース、カット（紋きりステンシル版の作成）
写真7-8. 和紙（三桎紙）に紋きりステンシル版をスプレー
（使用色はアクリル絵の具を3版にそれぞれ、赤青黄の3色×3セット＝9色、白、パール）
写真9. 紋きり版の上に、人物版をスプレー（上記同色の組み合わせ）
写真10. 和紙（楮紙）の人物シルエット内に花柄版（3版）をスプレー（上記同色の組み合わせ）
写真11. 和紙をパネルに水張り
写真12. 和紙は3層構造となり、1層目（捨て張り/楮和紙）2層目（花柄/楮和紙＝生成り）3層目（紋きり及び人物/三桎紙＝薄手）、それぞれが透過し、3層目（紋きり及び人物）から2層目（花柄）が透けて見える構造となる
（*写真1-12提供：佐竹宏樹氏）

2-2. プロジェクト作品の一般公開展示発表

アートスペース nohako での一般公開展示発表は、5点のプロジェクト作品を中心に、佐竹氏のこれまでの制作作品と合わせ展示を構成した。公開展示中は、参加保育

園関係者をはじめ、作品に参加した園児と保護者が多数来場し、他園の作品の鑑賞等を通じて今回のプロジェクトへの理解を深めた。

〈プロジェクト作品〉



13



14



15



16



17

- 写真 13. 《Greeting flower (Ehara Nursery school)》2016年制作、333×530mm、ステンシル/和紙にアクリル stencil/acrylic on Japanese paper, photo: Kana Shinya
 写真 14. 《Greeting flower (Shirasagi Nursery school)》2016年制作、380×455mm、ステンシル/和紙にアクリル stencil/acrylic on Japanese paper, photo: Kana Shinya
 写真 15. 《Greeting flower (Yamato higashi Nursery school)》2016年制作、333×455mm、ステンシル/和紙にアクリル stencil/acrylic on Japanese paper, photo: Kana Shinya
 写真 16. 《Greeting flower (Yayoi Nursery school)》2016年制作、333×455mm、ステンシル/和紙にアクリル stencil/acrylic on Japanese paper, photo: Kana Shinya
 写真 17. 《Greeting flower (Nanami Nursery school)》2016年制作、333×455mm、ステンシル/和紙にアクリル stencil/acrylic on Japanese paper, photo: Kana Shinya

(*写真 13-17 提供 : nohako)

〈アートスペースnohakoにおける展示発表〉



18



19



20



21



22



23

- 写真 18. アートスペースnohakoでの作品展示 (プロジェクト作品のインスタレーションビュー)、photo: Kana Shinya
 写真 19. アートスペースnohakoでの作品展示 (《Greeting flower (Ehara Nursery school)》(L)、《Greeting flower (Yamato higashi Nursery school)》(C)、《Greeting flower (Nanami Nursery school)》(R))、photo: Kana Shinya
 写真 20. アートスペースnohakoでの作品展示 (《Greeting flower (Yayoi Nursery school)》(L)、《Greeting flower (Shirasagi Nursery school)》(R))、photo: Kana Shinya
 写真 21. アートスペースnohakoでの作品展示 (プロジェクト作品のインスタレーションビュー)、photo: Kana Shinya
 写真 22. アートスペースnohakoでの作品展示 (《Greeting flower (K.F.&H + S.maonadelpha)》(L) 2013年制作、《Greeting flower (K&I)》(R) 2012年制作)、photo: Kana Shinya
 写真 23. アートスペースnohakoでの作品展示 (《Greeting flower (K&N)》2012年制作)、photo: Kana Shinya

(*写真 18-23 提供 : nohako)

2-3. 参加保育園への作品の寄託と展示設営

発表後、作品は各参加保育園に寄託し、展示設営された。作品は子ども達の作品の観やすさに応じた高さ等の配慮がなされるとともに、子ども達が保育士や保護者とともに観ることの出来る場所が選ばれた。廊下、エントランスの棚、ホールの壁面等、それぞれの参加保育園の

状況に応じた場所に置かれた作品は、保育室や職員室等に隣接しつつ、保育現場の中に混ざり込んでいく。そうした様相は、アートが無機質なギャラリー空間の中のみ存在するものではなく、子ども達の生活や保育という社会機能を背景とする日常性の中においても位置付けられていく可能性を発見させた。

〈参加保育園における作品の展示設営〉



24



25



26



27



28

- 写真24. 中野区立江原保育園における《Greeting flower (Ehara Nursery school)》の展示設営
写真25. 中野区立白鷺保育園における《Greeting flower (Shirasagi Nursery school)》の展示設営
写真26. 中野区立大和東保育園における《Greeting flower (Yamato higashi Nursery school)》の展示設営
写真27. 中野区立弥生保育園における《Greeting flower (Yayoi Nursery school)》の展示設営
写真28. 七海保育園における《Greeting flower (Nanami Nursery school)》の展示設営

(*写真24-28 提供：nohako)

3. 参加保育園からの報告

プロジェクトの今後の展開に向け、各参加保育園においてアンケートを実施した。(設問:「1. 園内に展示頂いた作品に対する子ども達の反応や様子をお教え下さい」「2. 作品や今回のプロジェクトに対する保護者や先生方の感想をご紹介下さい」「3. 今回のプロジェクトを通じ、保育現場において子ども達がアート作品と出会い、ふれていく経験をどのように思われたか、回答者のお立場からご意見をお聞かせ下さい」) 本レポートでは、参加保育園ごとの全意見を記した。

・「1. 園内に展示頂いた作品に対する子ども達の反応や様子をお教え下さい」に対する回答

- ・きれいだっ／すごくかわかった／キラキラしている／こおりがさらさらしてきれい／とても楽しそうな絵／キラキラがかわかった／キラキラがきれい／色んな人とかキラキラがかわかった／人とかお花がキラキラしてかわかった／いっぱいキラキラしている／お花がきれい／お花がすごくかわかった／きれいで楽しそうだった
- ・すごい、W先生がいる、だって眼鏡をかけている／先生が3人いる／目とか鼻がない／氷みたいに見える／髪の毛が似ている／髪の毛の形が似ている／体の形が似ている／「保育園のどこかわかる」という質問をすると、「すべり台のところ」と答えが返ってきた／「どこのクラスかな」という質問をすると、「にじ組さん」と答えが返ってきた／「自分がどこにいるのかな」という質問をすると、にこにこしながら一生懸命さがす様子がみられ答えが返ってきた
- ・保育士や自分、友達をどれだろうと探したり、絵画を囲んで楽しそうだった／自分達がモデルということで嬉しそうだった
- ・すでにギャラリーでの展示を観に行っていた子ども達もたくさんいたので、「これ知っているよ。〇〇ちゃんだよ」と自慢気に指をさす姿が見られています。特徴がある子ども(メガネをかけた子ども)がいるので、「これ、〇〇ちゃんでしょ」と作品を見ながら話す様子も、なんとも良い雰囲気です
- ・かっこいい／作ってみたい／素敵／かわいい／嬉しい／きれい／どうやって作っているのか見てみたい／魔法にかけられた絵に見える／色がたくさん使われているので、笑っているように見える／作品と写真を並べて展示すると、二つを見比べて興味しんしんに観ていた／自分や友達の姿を探して、楽しみながら作品を観ていた／保護者と一緒に作品を観ながら、思い出話をして盛り上がっていた

・「2. 作品や今回のプロジェクトに対する保護者や先生方の感想をご紹介下さい」に対する回答

- ・絵から我が子を想像しながら見ました／雰囲気がとても素敵だと思います／写真的な作品になるかと思っていたので、こんな感じに仕上がるとは思わなかった／子どものいる場所はプールとわかっているが、知らない人を見ると温泉に入っているようだ／顔のない絵だったので、モデルは誰なのかと探してしまっ／保育園らしい場所としてプールが選ばれていたのは意外でした／お休みの子に関して、後から加えて頂いたので良かったです／園に飾らせて頂いて、その場所が明るくなり良かったです／ただただ素敵だなと思いました
- ・とてもあたたかくて優しい作品だと思いました。色づかいもとても素敵ですね／色づかいがきれいですね。子どもも「これが僕で、これが〇〇ちゃんだね、きつ」と嬉しそうに話していました／園に入った瞬間、ぱあっと明るい色づかいにすぐに目を引きました。子ども達のにぎやかな声が聞こえてきそうとても素敵ですね。子どもにも見せて芸術鑑賞してみたいと思います／幻想的な作品で、あの写真からカラフルな遊び心のある作品になったことにびっくりしました。いろいろな表現方法があることに感心しました／子ども達の姿もかわいらしく、わいわいと楽しむ様子が伝わってくるようでした。それと同時に先生方が優しく見守ってくださる様子もあたたかく、全体から愛があふれる作品で、嬉しかったです／柔らかな印象で、子ども達の楽しそうな様子が伝わります。息子も参加していますが、見つけられました／配色が素敵です。素材が少し浮き出て見えるところや、近くで見ている時と遠くで見ている時の見え方が違ったりして、少し不思議な感覚もあることを感じました／とても美しい素敵な作品になって見入ってしまいました／色合いがとてもやわらかくて素敵だなと思いました。心がほんわかしました／とても素敵な絵になっていました。子ども達もとても喜んでいました／表情は描かれていないのに、楽しく遊んでいる様子が色づかいや人物の姿から伝わってくるので、見ていて和やかな気持ちになりました／どのような作品になるのか楽しみにしていました。とても不思議できれいでびっくりしました／色合いが美しいと思いました。保育園内ではあまりふれることの少ないタイプの絵だと思ったので、こういうアートにふれる機会を意識したいと思いました／素材がなかなか保育園では手に入らないものなのか、素敵でした。現4歳の子は、どのシルエットが自分なのかよく見ていました／不思議な世界です。はっきりと「自分」「〇〇ちゃん」とわかるのですが、実感がありません。子ども達を「〇〇ちゃん」と見つけ楽しんでみましたが、

自分ではないような、とても美しい世界です／不思議な感じで、幻想的で素敵です／子ども達の歓声が聞こえてくるような感じがします。暖かい雰囲気です／素敵だなと思います／素敵です／メルヘンの中に保育のすばらしさを見ました／子ども達の姿がお花になり、楽しさが伝わってきます／色彩がとても素敵でした。写真と全く違う雰囲気になるんですね／保育園の廊下に飾られたら、子ども達が「うわー、見てみてー」と興奮していて、その声に大人も引き込まれるように見えました。とても素敵な作品ですね／お花になった保育園の子どもや保育士は、目や鼻、口が無くても表情がわかるのがすごく不思議です

- ・3歳児クラスだったこと、時間が経っていたということで、忘れてしまっていたり、自分がどれか特定出来ずにいた子がいました。作品のイメージもあると思いますが、その時の写真があればもっと楽しいかなと思ったりしました。
- ・とても喜んでいました。見学にいらした方にも「素敵ですね」と言われて、嬉しく思っています。今年異動してきた職員は、「こんな良いことがあるんですね」と驚いたり、感激したりです。
- ・子ども達自身が作品になっていることで、興味を持って観ていた。また作品を通して、昨年の思い出を親子で振り返り、成長を喜び合うきっかけとなっていたので、とても良かったです／とても温かい雰囲気です、楽しさが伝わってくる素敵な作品でした／目や口などの顔のパーツがないのに、子ども達の表情が見えるようでした／色のグラデーションが素敵で、自分でも作ってみたいになりました／実際にギャラリーに行かせて頂き、他園の作品も拝見しましたが、どれも個性のある作品の中、自園の雰囲気も感じられて楽しませて頂きました／子どもが誰なのか、判ったり判らなかつたり、予想して探してみるなど、写真と見比べて答え合わせをするのが面白かったです／花や星などがちりばめられていて華やかな作品でした／とても華やかで、子ども達の表情もキラキラしていて、自分達をモデルに作られていることを喜んでる姿を見て、とても嬉しく感じました／保育園では、集合写真と言えば全員の顔がはっきりと見えているものや、身だしなみに重点をおいて撮影しますが、佐竹先生の作品の題材として選んだものは、隣の子と重なっていたり下を向いている子が写されたものだったので驚きました。それが作品になると、それらが自然な動きで躍動感があり、色使いや様々な工程を重ねていくことで、優しく温かい雰囲気の作品となり、観ていてとても癒されました

- ・「3. 今回のプロジェクトを通じ、保育現場において子ども達がアート作品と出会い、ふれていく経験をどのように思われたか、回答者のお立場からご意見をお聞かせ下さい」に対する回答
- ・ありのままを見て、描かれた子ども達を普段見ているので、違った雰囲気の上崩りに、こんな表現方法もあるのだと勉強になりました。それは子ども自身も作品を見ることで感じているようで、「きれい」や「かわいい」と素直な感想を伝えていました。描くことだけでなく、見ることもアートにふれる良い機会なのだと思います。ありがとうございました。また作品の技法などで子ども達とのやり方や教材がありましたら、ぜひ教えて下さい。今は色々なものがキャラクター化しているので、子どもの描く絵も昔とは変わっているように思います。子どもが自分の心で感じて表現することを大切にしたいと思います。
- ・子ども達の日常の姿がこんなに素敵なアート作品になり、また身近に体験できる機会を頂いたことに感謝しております。乳幼児期は、様々な活動を通して五感で感じることを大切にしていますが、このようにアート作品を身近に見ることが出来る機会は保育園ではなかなかありません。遊びとしての楽しい造形活動や絵画活動などの活動の工夫はしていますが、実際に作品にふれる活動までは出来ていません。今回の作品は、4歳児が3歳児の時の自分ということで、夢中で自分や友達を探したり、先生を探したり、そうして見ているうちに楽しく遊んでいる皆が見えてきて、見れば見るほど楽しくなってくる不思議な絵になっていました。保護者も職員も、見れば見るほど子ども達の楽しそうな表情や関わりが見えてきて、くっきりと浮き出てくるシルエットが写真では見えない人の優しさまで感じさせてくれます。子ども達の感性は、環境や生活の中で育っていきます。子ども達の様々な力を育てていくためには、もっと環境を考えなければいけないし、また職員自身も自分の感性を磨いていかなければいけないと改めて思う機会になりました。本当に色々深く感じる機会になりました。ありがとうございました。
- ・機会が沢山持てると良いと思う。園に先生の絵が来て、アート作品に身近にふれ、こうしたアンケートに答える中で、クラスの子どもの描画の飾り方、工作の取り組みませ方等、改めて考えるきっかけとなりました。ありがとうございました／保育の中では環境設定はとても重要だと思います。絵を飾るというだけでなく、当たり前前に園内には、子ども達の個々の作品が置いてある（ブロック制作、泥だんご、粘土の制作物など、なんでもです）、注意して観るのではなく、アートが園内にあふれているのが自然である、そんな環境が整えら

れると良いですね。子どもにとって偶然に出来上がったものであっても、「飾る」というひと手間をかけることで作品に命が宿るといふか、そういうひと手間を大切にしていきたいものです

- ・今回のような素晴らしいプロジェクトに参加させて頂き、本当に嬉しく思っています。ありがとうございました。子ども達は、皆、一人ひとりが芸術家でありませう。それぞれの表現をそれぞれの素敵と捉えています。その中で「本物にふれる機会」を大切にしたいと常々考えています。音楽であれ、運動であれ、「本物」を経験する機会を年に一度はと取り組んでいます。今回のアート作品との出会いは、まさに本物にふれ本物を感じられ（しかも親子で！）、とても良かったです。今後もうこういった機会があったら良いなと思っています。
- ・自分達が作品になる、そんな世界があるということにふれたことは、子どもにとってとても大きな経験になったと思います／作品を観て、「やってみたい」という声が上がっていたので、子ども達と一緒に作品を作りたいと思いました／本物の作品にふれることで、子どもも大人も「やってみたい」という気持ちになり、造形表現遊びに対しての意欲が高まりました。日頃の保育の中でも大切にしている「幼い頃に本物にふれる大切さ」を改めて実感しました／見たものや知っているものを、その通りに描き、作ることが苦手な子ども、いろいろな表現方法を知るきっかけになるのではと感じます／今回の作品を拝見し、今まで図工や美術というものが苦手でしたが、私自身もやってみたいと思いました／小さいうちから本物にふれることで、苦手意識を持たずに表現できるようになりました／園では子ども達の作品を飾りふれる機会はあるが、大人のアート作品にふれる機会は少ないので、貴重な経験になったと感じた。様々な作品にふれていく中で、子ども達の間を育てることが出来ると感じた／写真をもとにした作品を見たことで、子どもがいつもと違う視点で写真を観る姿があり、アート作品にふれることの大切さを感じた／作品を観ることで、作り方にも興味を持ち、豊かな感性や表現力が養われると思った／作品を観ながら、自分や友達を探す面白さを味わい、そこから「不思議だな」「何だろう」という興味関心が出るのではないかと感じた

まとめ

今回のプロジェクト名である「花は野にあるように」は、千利休が「利休七則」に残した茶花の在り方を示す言葉を用い、「花柄」をあしらった人々を表現する佐竹氏の作品が「野」へと拡がるイメージをプロジェクト名に重ねている。そうした今回のプロジェクトは、以下の二つの成果を見出すものだった。

一つは、中野区というローカルな地域エリアを表現の場として捉え、アート活動がその中でインスタレーションアートとして展開出来たことである。インスタレーションとは、本来的に絵画をギャラリーに飾る、あるいは立体作品を設置する等の展示用語であったが、それ自体がアート表現となる現在、オーディエンスとのコミュニケーションをはかるために設えられた場を広く示すものとなっている。今回のプロジェクトにおいては、インスタレーションの対象空間の概念を都市空間としての地域エリアに読み換え、保育園にアート作品を存在させる、あるいはアート作品にふれる場を地域社会の中に設置することを具現化し、アートの可能性を引き出すものとなった。

二つ目の成果は、プロジェクトを通じて、子ども達や保育園関係者がアートに参加するオーディエンスとして日常の保育環境からのアウトリーチを経験し、またアート活動が、ギャラリーの制度や空間性、美術作品の従来の鑑賞方法からのアウトリーチを経験したことである。中野区は東京都内の中でも、美術館が無くギャラリーも少ないエリアの一つである。そうした地域性の中で、子ども達がアーティストに出会い、自分がモデルとなって制作された作品が展示されるギャラリーを訪れる、あるいはアーティストやギャラリーが従来の展示空間とは別空間に作品を移しアートを提示することがプロジェクトによって実現したのである。今回のプロジェクトは、そうした子ども達や保育園関係者とアーティストやギャラリーの双方の歩み寄りを、アートによって導き出せたといえるだろう。

これらの成果とともに、アートを通じた子どもの造形表現への支援は保育現場の理解と環境が十分に整わなければ困難であることも、プロジェクトの様々な場面において痛感をした。このような今回のプロジェクトを共に進め、協力を頂いた参加保育園や中野区子ども教育部、また充実したプロジェクト作品を仕上げた佐竹宏樹氏には、心から感謝をしたい。今後も保育現場とアートの接点をつくり、子どもの造形表現を豊かなものにしていく支援を継続していきたいと思う。